特定非営利活動法人

ちば環境情報センター

ＣＥＩＣ

2024.　３．　６発行　　ニュースレター第３１９号

写真等無断転載禁止

〒262-0019　千葉市花見川区朝日ケ丘 ５－２４－２
TEL.090-7941-7655　FAX:043-483-0027　　代表：小西　由希子
E-mail:yatsudasukisuki@gmail.com ，　Home　Page:http://www.ceic.info/

人は畑で麦を踏む、げに小春日ののどけしや～

楽しい！農的生活をしませんか？

ちば環境情報センター 副代表 船橋市　長　正子

私たちは毎日ご飯やパン、野菜を食べて生きています。しかし、私たちはほとんど、食物を育てている現場から切り離されて生活しています。街には多様なお肉、果物、野菜などの食品が満ち溢れていますが、どのようにして育てられているかを知ることなく、また自分が作るということはほとんどなく、ただ消費者として食べています。

かくいう私もちば環境情報センターに入会するまでは田んぼや畑に入ることは全くありませんでした。私は新潟市の出身で、米作り日本一の越後平野に抱かれて育ったのですが、一度も田んぼに入ったことはありませんでした。小、中、高の学校教育でもお米作りの現場を経験するというような実習は全くなく、ただひたすら受験勉強をして育ちました。

しかし、結婚して千葉県に来て豊かな自然を感じ、と同時に環境問題の深刻さを感じ、ちば環境情報センターに入りました。ちば環境情報センターには、環境問題の解決のために少しでもできることをやろうという人たちが集まっていました。また千葉県固有の谷津田の自然に魅せられてその保全活動をする人たちも集まっていました。多様な生き物を守るために無農薬でしかも機械を入れずに田んぼを耕し、メダカやドジョウ、カヤネズミ、アカガエル、トンボなどたくさんの生き物を観察し守っていこうとしていました。お米作りは田んぼに生育する生き物たちのために行うと同時に私たちも安全なお米が食べることができるのです。

かくて高齢者である私も田んぼでの作業はできるのかなという不安はありましたが、できる範囲でいいという暖かい言葉をいただき、足を田んぼのぬかるみに取られながら稲を植えたり、刈り取った稲の束作りをしたりして農作業を体験しました。

結論を一言でいうと、農作業は予想以上に楽しいです。確かに多少の疲れはありますが、それ以上に田んぼの中は温かく、土は柔らかかったです。そしてきれいな空気、広大な大地、高い樹木があり、鳥がさえずったりしている中で労働するということはとても楽しく、すがすがしかったです。また子どもたちは泥んこになって遊んだり、ザリガニを取ったりして遊んでいてその姿を見ると、とても幸せな気もちになります。そこに人間本来の姿があるんじゃないかと思ったりします。(言うまでもないことですが、下大和田の自然がそれだけすばらしいということもあります。)

みんなで麦踏み(2024 年 1 月 20 日)

しかし今、残念ながら下大和田の開発の危機が迫っています。今年は米作りができるかどうかもわからないという状況です。しかし、ちば環境情報センターはそんなことでひるむことはなく、昨年の秋から他の地主さんから畑を借りて、麦やじゃがいもを作り始めました。そして私はこの冬、初めて「麦踏み」を体験させてもらいました。昔、小学校唱歌で「人は畑で麦を踏む、げに小春日ののどけしや～」と歌った記憶がありますが、その麦踏みを初めて経験したのです。これも感動しました。いいようもない土の柔らかさと温かさが身体を包み込みました。麦踏みは麦をいじめているわけではなく、土の中に押し込むような感じで、霜から守るために麦踏みをするということがわかりました。

かくのごとく、作物は人の手によって育ち、育った作物は食物となってわたしたちを育ててくれます。しかし、一方で、農業従事者はどんどん減少しているそうです。現在120万人いる農業従事者が20年後には４分の１の30万人になると言われています。また、今のお米の農家の高齢化は深刻で、65歳以上の年齢層の人たちが７割を占めているといわれています。その人達がいなくなれば、お米の生産も危うくなります。

農家に転身するのは難しいと思いますし、一人で始めるのも大変です。しかし、私たちのようなNPOの活動に参加し、たくさんの生き物と共存していくような農作業をやってみたらどうでしょうか？そしてみんなで作ったお米でお餅つきをしたり、豚汁を食べたり、ザリガニ釣りをしたりするのです。それはとても楽しい作業です。生きる喜びです。

そして自分たちが食べるものを自分たちで作る、そんな理想に少しでも近づいてみるというのはどうでしょうか？

今、ちば環境情報センターは新しい仲間を求めています。どうぞ、トライしてみてください。

船橋市の海老川上流部で計画されている メディカルタウン構想のその後について

都市鳥研究会 船橋市 越川 重治

ニュースレター第315号でお知らせした船橋市の「メディカルタウン構想」について住民投票を求める署名の際はたいへんお世話になり。ありがとうございました。地方自治体法で規定された有権者の50分の1である10732筆にわずか226筆足らず残念ながら住民投票はかないませんでした。

「メディカルタウン構想」にはたくさんの問題点があります。「メディカルタウン構想を考える市民連絡会」は、以下の点を指摘しています。①この地区は超軟弱地盤ゆえ大地震の際は液状化の恐れがあるのに災害拠点病院である市立医療センターを移転する。②この地区は遊水地であるため、埋め立てると洪水のリスクが高まる。③たった一つの土地開発に約 1000 億円（税金での補填が予想される病院の借金を含む）もの巨額な市費を投入。福祉サービスや他の事業よりメディカルタウン優先の偏った税の配分をしている。

そこで「メディカルタウン構想を考える市民連絡会」は新しいアクションとして「メディカルタウン構想」を見直させるために、住民監査請求という法的手段を使って市立医療センター用地購入の違法性を追及し、同時に数万人規模の大規模署名を行って事業反対の意思表示をすることになりました。この署名は船橋市民だけでなく全国に対象地域を広げるものです。内容をよく吟味され皆さまにも署名に参加してほしいと思います。よろしくお願いいたします。

＊請求文骨子と署名簿は右のQRコードからダウンロードできます。

人類の最重要課題“C（カーボン）ニュートラル”、“N（ネイチャー）ポジティブ” を地域でどう実現？

－市川市の「人工干潟造成計画」に物申す！part２（前編）－

市川緑の市民フォーラム事務局長　市川市　佐野　郷美

C（カーボン） ニュートラルに熱心な市川市が何故？

市川市長田中甲氏は、昨年初め市役所内に「カーボンニュートラル推進課」を設置した。地球温暖化を少しでも緩和するために、市川市として積極的に取り組もうとしているように見える。だから、環境省の「脱炭素先行地域」指定も目指している。地球の一部である市川市としてぜひ実現したいものだ。しかし、多くの市町村が同じ「脱炭素先行地域」指定を目指しているのも事実だし、指定されても思うように脱炭素化が進まない自治体が多いという話もいろいろな所から聞こえてくる。

私には、このように C（カーボン） ニュートラルを目指す市川市が、その一方で塩浜親水事業（人工干潟造成事業）を計画すること自体が理解できないし、そんな

事業を計画している市川市を、環境省が「脱炭素先行地域」指定するとも思えない。

何故なら、今でも「人工干潟」と聞くと何となく海域環境を改善し、都市部では人と海との触れ合いの場を復活させる素晴らしい事業のように見えるかもしれないが、実は、それは大きな間違いであり、この土木事業で大量の CO_2 を放出することは当然で、今たくさんの生物達が生活し、様々な生態的機能を有する塩浜２丁目前面浅海域に土砂投入することは、多くの県民の力で守られた海“三番瀬”の一部を、改めて破壊することになるからである。これは、生物多様性の保全のために、国際的に、そして強力に推し進めることとなった「N（ネイチャー）ポジティブ」というコンセプトと、それを実現するための「30by30」にも反する事業であると考えられるからである。

写真１：市川市が土砂投入して人工干潟を造成したいとする塩浜２丁目前面の浅海域

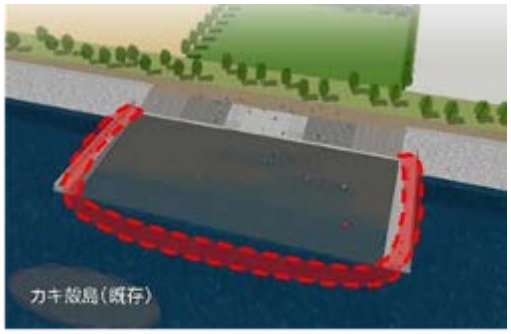


図１：千葉日報（2023 年 8 月 27 日）に掲載された人工干潟イメージ図（幅 100m、奥行き 50m）

N（ネイチャー）ポジティブと 30（サーティー）by 30（サーティー）

“気候変動”という表現が、“気候危機”という言葉に、そして地球温暖化がより顕著になる中で最近では「地球沸騰化」とも言われるようになった。その原因となる最大の温室効果ガス CO_2 の人類活動による排出量を、植物たちが吸収する CO_2 量と等しくする中で、地球全体における CO_2 排出と吸収をプラマイ 0（ゼロ）にしようとする「C（カーボン）ニュートラル」という言葉は、ようやく全世界に浸透してきたが、「N（ネイチャー）ポジティブ」と「30by30」については、人類社会への浸透は今一歩なので、少しだけ説明させていただきたい。

学校の社会科の授業で習った“産業革命”。それは、実はとんでもなく人類の生き方が変化した時期である。人類が使ってきたエネルギー源が、人力・水力・風力・木材火力（バイオマス）・家畜力から、石炭・石油へ。動力は蒸気機関・内燃機関へ。その変化の中、人類は爆発的に自然を大きく改造する力を持ち、広大な森林伐採・湿地、沼、干潟・浅海域の埋立と干拓、トンネルや浚渫などによる山河の破壊が行われた。その結果、広大な人の居住地・農地・工場地帯が出現し、食料が増産され、人口が急拡大。知らぬ間に、自然は大きく減少し、生物はかつての 100～1000 倍の勢いで絶滅していったのである。

そういった人類の今までの生き方が間違っているのではないかと気づいたのが 1970 年代（国連人間環境会議 1972）だった。しかし、大きく環境保全側に舵を切ろうとしたがうまくいかず、人類はさらに強い決心の上に「気候変動枠組条約」「生物多様性条約」を作ったのが 1990 年代（国連環境開発会議（地球サミット）1992 年）だった。だがそれでも歯止めがかからないとして、とうとう 2021 年の G7 サミットにおいて約束されたのが「30by30 目標」であり、一昨年末カナダのモントリオールで開催された「生物多様性条約締約国会議 COP15」で、「N（ネイチャー）ポジティブ」の実現に向けた具体的行動として「30by30」が真剣に議論されたのです。

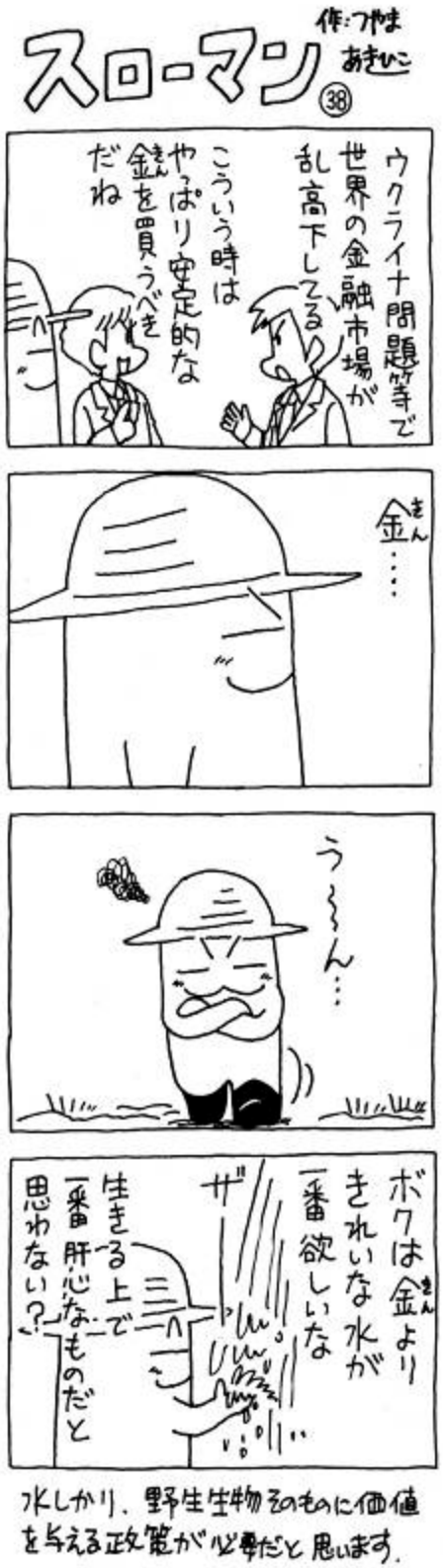
1850 年頃に始まった産業革命以来、ずっと減少してきた自然・生物多様性を 2020 年を基準年として、2030 年までに自然・生物多様性のこれ以上の減少を食い止め、自然環境とそこに暮らす生物達の多様性を少しずつ回復基調に乗せようとする、人類史上画期的な挑戦なのである。（**つづく**）

新浜の話 73 ～真っ赤なトラクター～

千葉県野鳥の会　市川市　蓮尾　純子

1997 年５月 14 日、雨の中、市川南ロータリークラブの創立 20 周年記念事業の一環として、同クラブが市川市に寄贈した真っ赤なトラクターの贈呈セレモニーが行われました。行徳内陸性湿地再整備事業で保護区の中に造成された新しい池の管理作業用のものです。

第一期・第二期と行われた再整備で保護区の半分近くが湿地や池として造成されました。残念ながらポンプ設置の認可や工事の遅れ、更には延々と続いたポンプのトラブルのため、水が全体にまわるのはまだまだ先のことになるのですが、水鳥の保護区としての大きな一歩が踏み出されたわけです。目指しているのは浅く開けた水面。



ちょうど水田や蓮田のような環境です。こうした環境はヨシやガマといった丈の高い湿地の植物が大好き。絶えず手を入れて、ぜんたいが植生に覆われないようにしなくては、水鳥が好む状態が維持できません。これだけの広大な面積の維持管理は手作業ではとても間に合わず、ユンボ―やトラクターといった重機が必要になりました。

トラクターの収納のため、当時の担当課である農水産課が農業用のビニールハウスを購入してくれました。組み立ては自分たちでやったのだったか。

この年は、新しく造成された池の管理作業は業者委託で、おなじみの黒沢さんほかがていねいにやってくださいました。それでも翌年からは、こうした作業を内部スタッフでやりたい、とがんばりました。男衆にとっては、その分仕事がふえるわけで、楽な話ではありません。それでも、この植物は残したい、とか、こちらの水を干上げる間、あちらの水は残す、といったこまかい気くばりをしながら作業を進めたかったのです。保護区の管理作業の対象は生きものなのですから、作業効率と工期を優先する業者委託ではどうしてもうまくできない部分があります。

「じゃあ、トラクターがけも草刈りも外に頼まなくていいんだね」

念を押された時には、正直なところびくびくものでした。でも手もとにトラクターがあるのですから、やってやれないことはない。今にして思えば、みないい度胸をしていたのですね。

「いや、断然この方がいいですよ。大丈夫です。大船に乗った気でまかせてください」

‥‥‥いいのかなあ。私にできることといったら、様子を見て方針を決め、お城の留守を守って鳥の世話をし、あとは麦茶をわかしたり、泥だらけの作業衣を洗濯することくらい。

ロータリークラブにいただいた初代のトラクターには、ちょっとやそっとではない苦労をかけたと思います。私たちが不慣れだったためももちろんありますが、保護区の地盤・土壌の構造も問題でした。前にも書きましたが、保護区は造成された埋立地、その上に周囲の埋立地から流し込まれた上澄みのシルト泥の層があります。トラクターをかけるのは、このシルト泥。まだ土壌としての構造ができていない粘土のような層です。もともとトラクターは乾いた土か、水が薄くかぶった水田のような場所で使うもの。ぬかるんで重くねばる泥は禁物。タイヤがぬかるみにはまって動けなくなること、何度も何度も。そのたびに重い足場板を運んだり、泥を掘ったり、泥まみれの重労働が続きます。業者さんにお願いて救出してもらったことも、１回や２回ではありません。それでも男衆たちはめげませんでした。くじけず、めげず、あきらめず。環境保護に携わる際のモットーです。

真っ赤なトラクターは現在３代目。土が土壌として育ってきたためか、初代のようにぬかるみにはまって救出という事態は今ではまずないそうです。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2024年　4月号（第３２０号）の発送を　4月　8日（月）１０時から千葉市民活動支援センター談話室（千葉市中央区中央２-５-１　千葉中央ツインビル２号館９階）にておこなう予定です。お手伝いいただける方は事務局（小西 090-7941-7655）までご連絡ください。

あなたも入会しませんか ―――― キリトリセン ――――

住所〒

ふりがな
氏名　　Tel

E-mail　　FAX

会費の郵便振替口座は 00130-3-369499 です。

編集後記：下大和田のニホンアカガエルの卵塊は 2 月 10 日の初認後、2 月 27 日には 117 個になりました。3 月 3 日の観察会で新たに見つかった卵塊は 1 個、今年の産卵はほぼ終えたのではないでしょうか。2019 年に 1404 個の卵塊を記録してから減少が続き、一昨年 469 個、昨年 201 個と毎年半減しています。アカガエルが産卵できる貴重な谷津田が、今失われようとしています。継続に向けて、皆さんのご協力をお願いいたします。　mud-skipper

◆◆

【活 動 報 告】

＜下大和田での活動＞　写真：田中正彦

第 289 回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い　2024 年　２月　４日（日）雨　報告：田中正彦

今年２回目の観察会とごみ拾いは、朝から冷たい雨が降る中での実施となりました。夏の雨はカタツムリやカエルの活動が活発になって、楽しいこともあるのですがこの時期の雨は…。それでも、大学生３人を含む 13 人の自然大好き人間が集まり、谷津田をめぐりました。

今日のテーマは、ニホンアカガエルの卵塊を探しながらの谷津田散策と冬鳥の観察。先ずはＹＰＰ田んぼから観察しました。雨でぬかるんだ畔を崩さないように慎重に歩きながら、水面に目を凝らしました。畦にはイノシシの足跡がいっぱい。あちこちで掘り返されていました。マイ田んぼも見ましたが卵塊は見つかりませんでした。

田んぼ散策の後は森に入って、赤い実をつけたマンリョウや切り株に生えたカワラタケ、サンショウの葉痕観察などを行いました。フユイチゴの赤い実が残っていて、初参加の大学生に味わってもらいました。

花澤さん田んぼも含めて、ニホンアカガエルの卵塊は見つかりませんでしたが、新芽のふくらみなど春の近づきを感じる観察会になりました。

＜記録した野鳥＞アオサギ，ハイタカ，モズ，ハシブトガラス，シジュウカラ，ヒヨドリ，メジロ，ツグミ，カシラダカ，アオジ　以上 10 種。

参加者１３名（大人１０名、大学生３名）

・・・

森と水辺の手入れ「アカガエルの卵塊調査と畦の整備、森の草刈り」

2024 年 **２月１８日　晴れのちくもり**　**報告：平沼勝男**

最初にアカガエルの卵塊調査をしました。ほんの数日前にもしましたが、この日来た人達も興味あることだったので。結果はＹＰＰ田んぼ 33 個、マイ田んぼ６個、花沢さん田んぼ 17 個、計 56 個。イノシシによる畔の被害は大変なことになっていました。特にマイ田んぼ側です。

そのマイ田んぼの卵塊の数が少ないことが気になります。比較的に被害が少ないＹＰＰ田んぼの数が大きいことを考えるとイノシシは冬眠中のアカガエルを狙って畔を壊しているのではないでしょうか。それと、数日前にあったはずのＹＰＰ田んぼの 10 数個の卵塊がそっくりなくなっていました。人の手によって取られた可能性があります。

活動の方ですが、トンネルの側溝の掃除。アカガエルの為のＹＰＰ田んぼの畔の補修。水が漏れないようにしました。そして台地の上の草刈り。草刈りはタラやクヌギまたはコナラ、イヌシデ以外の草木を刈り払い機で取り除きました。　**参加者８名（大人７名、小学生１名）**

＜小山町での活動＞

☆第 223 回 小山町 ＹＰＰ「あぜの手入れ」　2024 年　**２月１８日　晴れ　報告：たんぽぽ**

畦の整備を二手に分かれてやりました。今年はイノシシが派手に畦を荒らし、思いきりやりがいのある作業でした。ひんやりとした肌寒い日でしたが、汗びっしょりになりました。その甲斐あって、畦や水路がずいぶんと良くなりました。春の田植えに間に合いそうです。　**参加者５名（大人４名 高校生１名）**

【谷津田・季節のたより】　2024 年　２月

＜下大和田町＞　報告：網代春男

2/10 ニホンアカガエルの産卵、やっとひとつ。

2/16 25 個の卵塊をＹＰＰ田で確認。産卵が遅く、少ない。**イノシシに畦を荒らされた影響が出ているように思える。**

2/17　ニホンアカガエルの卵塊数：ＹＰＰ田 34、マイ田んぼ５。

2/18　ニホンアカガエルの卵塊数：ＹＰＰ田 33、マイ田んぼ６、花澤さん西田んぼ 11、東田んぼ６。

2/27　ニホンアカガエルの卵塊数：ＹＰＰ田 54、マイ田んぼ 12、花澤さん西田んぼ 15、東田んぼ 12。

・今冬はウスタビガやヤママユの蛹をひとつも見なかった。鳥も少ない。異変が起きているように思える。

＜小 山 町＞　報告（た：たんぽぽ、赤：赤シャツおやじ、高：高山）

2/ 4　田んぼにクサシギ、てくてく歩く(た)

2/10　体重 60kg のイノシシが捕獲される、ひだまりでオオイヌノフグリやホトケノザが咲き、梅香る(高)

2/11　アオジは地面を、ジョウビタキは視線の先を、カケスは枝高く飛び交う(赤)

2/15　アカガエル初産卵確認(た)、セグロセキレイの 2 組のペアが縄張り争い、モズがはやにえを食べていた、タネツケバナが田んぼ一面に咲いて例年の 3 月の光景（高）

2/18　クサシギがペアでいるのを初めてみる（高）

2/21　初夏を思わせる暖かさにアカガエルの卵塊がグンと増える（高）

2/26　ウグイス初鳴き、上手くない小さめな声で何度も練習(た)

2/28　日の出前、フクロウの声、アカハラ目の前を横切る（た)、シジュウカラのさえずり、キジのケン、ケーンが普通に聞かれるようになる（高)。

【イベントのお知らせ】

主　催：ＮＰＯ法人 ちば環境情報センター

連絡先：小西 TEL.090-7941-7655 ,E-mail ： yatsudasukisuki@gmail.com

＜下大和田谷津田＞

・森と水辺の手入れ

日　時：2024 年　**３月１７日（日）　９時 45 分～１２時**　雨天中止

内　容：雑木林を維持するために、アカメガシワやイヌザンショウなどの低木の処理を行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物　　**参加費**：無料

・第 301 回　下大和田ＹＰＰ「野草を食べる会」

日　時：2024 年　**３月２３日（土）　９時 45 分～１２時**　雨天中止

場　所：下大和田 わいわい広場

内　容：下大和田に生育する「食べられる野草」を採取、てんぷらやお浸しなどにして春の恵を味わいます。

持ち物：動きやすい服装、長靴、お弁当、お椀、飲み物、敷物

参加費：３００円（小学生以上）

・第 291 回　観察会とゴミ拾い

日　時：2024 年　**４月　７日（日）　９時 45 分～１２時**　雨天決行

内　容：春の花の季節到来です。ウグイスの囀りを聞きながら谷津を巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長袖長ズボンの服装、長靴（通常の)、帽子、ゴミ袋、弁当、敷物

参加費：100 円

＜小山町谷津田＞

▼第 224 回　小山町ＹＰＰ「苗代作り」

今期の苗代作りを行います。

日　時：2024 年　**３月３１日(日)　１0時００分～**　☆小雨決行

場　所：小山町谷津田

上記に限らず、参加ご希望の方は、赤シャツ親父（e-mail; tomizo_i@nifty.com)までご連絡下さい

◆◆